

AI と仲間と学び合う



梅野哲さん・吉田一貴さん

(相模原市立中野中学校教諭) に聞く

相模原市立中野中学校での生成 AI を活用した教育実践を知ったのは、2026年1月5日の日本教育新聞の記事でした。1人1台端末を用いて生成 AI を日常的に活用しており、生徒と AI との間で建設的な相互作用が生まれているということでした。この記事で紹介されていた、同校の実践をまとめた書籍『AI と仲間と学び合う 生成 AI ×対話×仲間=新たな学びの領域へ』(明治図書)を購入しました。「学びのスタンダード」という学習の基盤があり、その上での協働学習に生成 AI が活用されているという、特徴的な学習環境デザインにとっても興味を持ちました。このインタビューでは、梅野哲先生、吉田一貴先生のおふたりにお話をうかがうことができました。梅野先生は体育、吉田先生は数学が担当教科です。

インタビューー：CIEC 会誌編集長 寺尾敦 (青山学院大学)

「学びのスタンダード」

寺尾 本日はお忙しい中、インタビューをありがとうございます。中野中学校の実践を紹介された書籍『AI と仲間と学び合う』(明治図書)を拝読いたしました。主にその内容についてお話をうかがいたいと思います。「学びのスタンダード」という、小学校から中学校まで9年間を通して「つながる力」を育成する取り組みがされています。これが協働学習を進める基盤となっていると理解しました。こうした小中連携しての一貫教育は、中野中学校の校区では以前から行われていたことなのでしょうか。

注釈：中野中学校の校区では、小学校から中学校までの9年間を通して、「つながる力」の育成を共通目標に掲げています。この「つながる力」のねらいには、自分と異なる意見を受け入れ、信頼関係を築くための話の聴き方を学ぶこと、自分の意見や考えを相手に伝える方法を学ぶことがあります。(『AI と仲間と学び合う』p.20より引用)

梅野 相模原市はどこの学区も小中連携を行っています。

寺尾 中学校に上がってくるはずの児童が通っている小

学校と、上がる先の中学校の連携ですか。

梅野 そうです。ただ、うちの学区の場合は幸運なことに、小学校の2校はどちらも中野中学校に上がってきます。他の学区の場合は、小学校から分散して違う中学校に通うところもあり、なかなか連携しづらいという課題があります。うちの学区は学習に関して連携ができましたけれども、他の学区ではなかなか難しく、生活面などの情報共有で終わってしまっていることもあります。

寺尾 学習面での連携は困難も多いんですね。

梅野 発達段階の違いがあるので、議論を深めるのには難しさがありますね。

寺尾 「学びのスタンダード」では、小学校から中学校の9年間を通して、「話す・聴く」ことの学習をずっと行っています。すべての教科でPDCAサイクルに基づいた学習活動が行われていて、授業ごと、あるいは単元ごとに、できたことやできなかったこと、次には何を指すかということを生徒が常に振り返っています。ここには二重の学習目標があって、とても興味深いです。教科には「この時間はなにに何を理解する」といった固有の目標があります。それと同時に、どの教科にも共通す

る「話し方・聴き方」の目標達成を自己評価しています。

この自己評価はかなり高度なメタ認知的スキルだと思います。うまくやれる生徒はもちろんいると思いますが、多くの生徒はうまくできるものなのでしょうか。小学校からやっているからかなりできているのか、あるいは、できていないところはやはりあって、何らかの支援や指導をされているのでしょうか。

吉田 「学びのスタンダード」を始めたころ、最初からうまくできたわけではないです。小学校と連携して同じ目標を作って、見える化として掲示物を作りました。それでも生徒はなかなかうまくできないことも多いので、学びのスタンダードの授業実践を、4月に先生に向けて展開しました。「こういうのがレベル3だよ」「レベル4だよ」といったものを、先生に体感してもらいました。

注釈：学びのスタンダードでは、「話し方・聴き方」にそれぞれ4つのレベルが設定されています。

寺尾 レベル3はこのようなこと、レベル4はこのようなことだと、先生方がご自身で実感されて、ご自分の行う授業に入るといことですね。うまくできていない生徒には、そのつど何かフィードバックをして、だんだんとできるようになっていってもらようよう支援するのでしょうか。

吉田 そうですね。各授業において掲示物を使ったり、「今日はレベル2を意識してみよう」、「レベル3をこのようにやってみよう」というように、具体的なものを示す工夫を行ったりして、できない子も少しずつですけれども意識ができてきます。

寺尾 各授業で具体的に「今日目指すのは、こういう聴き方だよ」「こういう話し方だよ」と目標が提示されて、しだいにメタ認知的な自己評価ができるようになっていくということですね。なるほど、よくわかります。

メタ認知は、心理学あるいは認知科学の世界ではかなりの歴史のある用語です。教育実践に役立つだろうと思える心理学の用語や概念は他にもいろいろありますが、それらが教育現場に浸透するには時間がかかります。中野中学校の場合は、10年ほど前に「学びの共同体」の理論を研修で学んで実践に生かすことをされていますね。学習科学や認知科学の概念を積極的に取り入れて実

践に生かしていこうということは、その後も続いているのでしょうか。

梅野 学びの共同体の実践をしていた教員はすでに他校へ異動してしまっています。私も違う学校で学びの共同体をやっていたので、学びの共同体とはどのようなものかわかってこの学校に来ました。私はここへ来て7年目ですが、私が来たときにはもう学びの共同体の実践はされていませんでした。そのころ、ちょうどコロナ禍になったのです。学びの共同体の実践はしていなかったけれども、学び合いの中で学習するということは大事にしていきたいと思っていました。校内でどうやって議論を進めていこうかというところでコロナ禍になり、ICTが入ってきました。学び合い、対話を重視して、お互いに話し合いながら考えを広げたり深めたりしていくことを大事にするという素地はずっとあったのです。そこに新しく、小中連携で「学びのスタンダード」をやっていることとなったのが令和4年です。全国学力状況調査で「話す・聞く」という項目が低かったので、小中の先生で話し合っ作っていきましようとなったのが「学びのスタンダード」のきっかけです。学びの共同体をやってきた先生方は残っていましたが、そこからどうしていこうかというところで、手探りで始めました。学習科学や認知科学を取り入れたというよりも、独学で、この中学校区で試行錯誤しながらやってきたという感じです。

寺尾 なるほど。そういった取り組みをされてみて、学習科学や認知科学での概念は、教育実践の現場にとって役立つものになっていると感じられますか。学習の研究者の立場ではそれが気になります。

梅野 生成AIが入ってきて、その必要性が際立ったなと思っています。今までは、学習科学や認知科学の専門用語が難しく、教育実践に落とし込むのはなかなか難しかったと思うのです。けれども、生成AIが来たことによって必然性が高まりました。生成AIに流されないために、学習者は自分の考えをしっかり持つことが大事です。自分の考えを誰かと比較したり、他者の考えを取り入れて自分の考えが変化したりするという、「建設的相互作用」がそこでしっかりと入ってきたのです。私にとってはそのような感覚があります。

寺尾 生成AIが黒船のごとく突然やってきて、「これ、どうしよう」というときに、心理学や学習科学の概念がはじめて腑に落ちたという感じでしょうか。

梅野 今までも頭の中には入っていたのですが、それがつながったという感じですね。

寺尾 「学びのスタンダード」は各教科だけではなくて学校生活全般で実施されているようです。小学校でもそうですね。中野中学校の実践にかかわっておられる青山学院大学の益川弘如先生は、学びのスタンダードという文化の中で協動的に他者と過ごしていると、協働的な学びに対する肯定的な学習観が育っていくのだろうと分析されています。「学びのスタンダード」を始めてから、中学校に入ってくる生徒さんの学習に対する考え方に変化は見られるのでしょうか。学習とは、1人で教科書や問題集に取り組むものとか、先生に教えてもらうものではなくて、仲間と学び合うものだという意識が育っている感じはあるのでしょうか。

梅野 最初は、令和5年度のスタートのところで、小学校6年生の1年間の学びを意識してやってきた子たちが中学に上がってきたときに、何か違うなと感じたのです。話をきちんと聴く姿勢が整っている。学びのスタンダードでの「聴き方」のレベル1（反応しながら聴く）なので、きちんと相手の方を見て、うなずいて聴くということがしっかりできていました。これができないと対話は始まらないですから。ここを小学校で徹底してくれて、「中学校でも同じことをやるからね」と送り出してくれた。第1期生は変化があるなと思いました。スタートラインが今までよりもちょっと高くなっていました。

他者（人）およびAIとの対話

寺尾 ここから、AIを活用した実際の授業についてお聞きしていきたいと思います。『AIと仲間と学び合う』を拝読して、学習環境の一部をAIに置き換えるのではなく、AIが新たなリソース、この場合は学習仲間となっていることにとっても興味を持ちました。しかも、学習仲間ではありますが、以前からの仲間である友人たちとは違う役割を果たしているとのことでした。梅野先生の実践では「ダブルバディシステム」と呼んでおられます。友人たちであるヒューマンバディは主に情動面で学習の支えとなっていますね。つながりがあって、一緒に学んでいる仲間がいるという安心感と励ましです。そこに、AIバディが客観的なデータや分析に基づいてアドバイスするという、主に認知的な面で学習を支援していると理解しました。

大学だと、なかなかそのようにうまくAIを活用でき

保健体育(長距離走) ヒューマンバディ×AIバディ

ダブルバディシステム



ヒューマンバディはAIバディからの視点（分析・助言）を受けて、走者の状態をモニタリングしながら適切な声掛けをする

ていません。たとえば、レポート課題をAIに丸投げされてしまうことに、大学教員は困っています。中野中学校の実践を知ると、大学はこれまでと学習のやり方を変えないとだめかなと思います。教員から一方的に課題を出して「これをやってください」だと、あまり興味もわかないし、1人で孤独ですから、よくわからなかったり時間がなかつたりすればAIに丸投げしてしまう。そうなるのは当然かなと思います。

中野中学校の実践と大学は何が違うのか考えてみますと、協働学習の場がとても自然に設定されていて、学習とは仲間といっしょに進めるものだという意識ができていくことに気がつきます。梅野先生の実践での持久走の例がそうだと思うのですが、1人で練習しているのではつらすぎるけれども、仲間と協力できるという自然な状況があります。もうひとつ違うのは、学習が自分事になっています。大学のレポート課題だと、それが自分の何の役に立つかわからないことが多く、学習が自分事になっていません。中野中学校の実践では、学習は仲間といっしょにやっている一方で、「これを学びたい」「この問題を解きたい」ということがそれぞれ自分事になっています。たとえば持久走の場合だと、自分の記録をどのように伸ばしていくかということは、もちろん仲間と協力しているけれども、1人1人が自分事の、自分の問題としてやっています。あともうひとつ、AIとの対話がとてもうまく続いていることに驚きました。単に「これを教えて」とAIにたずね、答えを得たら「ありがとう」とはなっていません。最初はおそらく先生がプロンプトを作っておられると思いますが、対話がとてもうまく進んでいます。長く話してしまったのでまとめますと、自然な状況の設定、自分事の学習、AIとの継続的な対話の3点が中野中学校での協働学習のポイントではないかと思っています。

梅野 バディシステムは、自分が担当する体育の授業で、以前からずっとやってきたことです。最初は水泳の

授業で、安全確保のためにバディを組みました。スキューバダイビングでのバディですね。それがもう20年ぐらいになります。そこからいろいろな形で、いろいろな種目に応用しながら、バディの関わり方をいろいろ変化させていきました。今のバディは、自分ではなく、相手の力を十分に引き出すために存在しています。その引き出すプロセスの中で自分も成長できるだろうという裏の狙いがありますけれども、まずは他者の力を引き出すために一生懸命アプローチするという関わり方をやっています。そこが協働学習の土台になっているのかなと思っています。持久走に限らず、何かあったらこの人に励ましてもらえる、アドバイスをもらえるという関係を作るようにしています。それがヒューマンバディの役割です。ただ、AIが来るまでは自分が持っている知識以上のアドバイスはできなかったわけです。この人にどのような課題があるのかということは、自分の知識のレベルでしか判断できなかったし、アドバイスもできませんでした。ところが、AIバディが入ってきたことによって、この人にどのような課題があるのかと深掘りしながら問いを設定できるようになりました。何ができて何ができないのかをAIバディから探ってもらったり、そこはわかるけれども適切なアドバイスができないときに、必要な知識をAIバディが補完しながらアドバイスしたりすることができます。人間のバディが自分の考えやAIとの相談に基づいてアドバイスする。アドバイスを受ける人は、AIバディからアドバイスをもらったり、ヒューマンバディからアドバイスをもらったりする。いろいろとぐるぐる回るような形を作ることができています。最終的に判断するのは自分自身です。AIからももらったアドバイスが、そのグラウンドで中学生ができる練習なのか、実現可能なか判断をすることが大事です。教師はそこを追求しています。どのようなアドバイスをもらったか、どのようなことをやろうと思っているのかを聞いて、「それはこの場面でできるの?」、「実現可能な?」と言ってあげる。最終的には人間のバディがそこまで支援をできるようになってくればいいのですけれども、1年生や2年生だとまだまだAIに流されてしまいそうなきときがありますから、そこは教師がサポートしてあげたり選択したりすることが大事です。そのようなことを繰り返しながら、AIからももらったものと人間からももらったものをうまく整理しながら、自分に合ったことをやっていくというのは訓練です。生徒は、何回も何回もやりながら、そうした環境に慣れてきています。われわれが幸運だったのは、「学びのスタンダード」で対話する、学び合うという感覚に慣れているから、AIとも友達と

も何回も対話します。

寺尾 AIとうまく対話が続けられていることがすごいと思ったのですが、やはりそういった、人を相手に聴く、話すということが習慣化されていることが、土台にあるということですね。

梅野 はい。それがひとつです。もうひとつは、教員がプロンプトをデザインして生徒に渡していることです。AIとは何度も何度も対話を繰り返すのだということを、プロンプトを渡してスタンダードにしています。そのため、教師の作成したプロンプトを使わないときも、何回もやり取りするのだということは感覚的に慣れていきます。1回質問して答えをうのみにするのはよくないという感覚は生徒にあると思います。

寺尾 プロンプトを用意することは、教材研究をしっかりと行えばできるのかもしれませんが、実践例を見ると、生徒たちは教師の用意したところから外れても、しっかりと対話ができているように思います。

吉田 そうですね。生徒たちは慣れていないといえ慣れています。われわれの想像よりもはるかにうまく端末を使っていますし、こちらがプロンプトを用意しなくても、私の数学の授業では勝手にチャットGPTを使っています。使い方を見ても、答えを聞く相手ではないとわかっているので、一方的にならないようにうまく対話して数学を理解するということまで育っている生徒もいると感じています。

寺尾 あとでおたずねする、生成AIについての生徒へのインタビューの結果に、生徒はAIを先生だとは思っていないということがありますね。学習の仲間である。人ではないけれども、自分たちと一緒に今までやってきた友達と同列に位置づけているようです。友達が相手ならば、「答えを教えて」と言って教えてもらっても、教えてもらって終わりにはならず会話が続きますね。そういったことが今までできているから、そこにAIという仲間が新しく来ても、自然と対話が続けられるのかもしれないと思いました。

教員研修

寺尾 『AIと仲間と学び合う』では教員研修について述べられています。これについてお聞きしたいことがあります。「学びのスタンダード」を決めて、これを生徒に

浸透させたいというときに、「教師のスタンダードチェックリスト」や「授業参観システム」によって、このようなことを大事にしたい、このようなところを見ていきたいということを教員研修で伝えていきますね。そうすると、どの教員が行うどの授業でも基本的なデザインは共通になるのかなと思います。益川先生は本書で、形骸化してしまうのではないかと最初は心配になったと述べていました。しかしこれは、とにかくこの形でやればいいのだということではなくて、基本となる考え方が示されて、それを基に実践を考えるデザイン原理のようなものですね。原理に従って先生それぞれが各教科で実践を工夫するということだと理解しました。

基本的なデザイン原則があることは、生徒の方から見ると学習の見通しがとてもよくなります。次の授業でいったい何が起こるのか、何も予想できないのではなくて、その授業で私たちはきっとこのような学習をしているはずだと、授業の前からかなり見えていると思います。この見通しのよさは生徒にとっての安心になっているのではないかと思います。いかがでしょうか。

吉田 その通りだと感じています。見通しが持てることによって、生徒が今何をやっているのかが非常にわかりやすくなりました。教師側も、ゴールなど何のためにそれをやるのか今一度見直すきっかけになっていて、狙いに沿ったものが準備しやすくなり、深く研究できるようになったと思います。

寺尾 その場その場で違うことに対応しなければならないことが苦手な生徒もいますよね。そのような発達特性を持つ生徒にとっては、だいたい見通しがついていると非常に安心して授業に入っていけるのではないかと思います。そのような側面はありますか。

梅野 あると思います。先生方がやりやすいように「教師のスタンダード」をなるべく少なく設定はしていますが、今年度は多くの先生の異動があったので、「教師のスタンダードの項目があるので少し意識してやってください」という話はさせてもらっています。

生成 AI についての生徒の認識

寺尾 最後に、生成 AI について生徒がどのような認識をしているかということについてお話ししたいと思っています。先ほども少しふれましたように、『AI と仲間と学び合う』での生徒へのインタビューによると、生徒は生成 AI を教師とは認識していないのですね。とても

興味深いです。知識を一方向的に教えてくれる存在ではないということですね。他の生徒とは、役割は違うのだけれども、学習の仲間として認識しています。大学では、学生は AI を自分の学習仲間だとは思っていないでしょう。レポート課題を丸投げすることが典型的で、教師か、便利な検索エンジンの代わりとしか思っていないのではないのでしょうか。中野中学校の生徒が、AI は教師ではないとインタビューではっきり言っているという、その認識がすごいなと思いました。日々の実践で、このような認識は自然にできてくるものなのではないでしょうか。

梅野 書籍が出たあとに卒業していった去年の3年生にも同じことを聞いたら、やはりその生徒も「先生とは違う」と言っていました。どうしてとたずねたら、「生成 AI には感情がないですよ」とか、「AI でなく、やっぱり先生に聞きたいこともあるし」と言っている生徒がいました。1年生のころからしっかりリテラシー教育をしているので、生成 AI を便利な道具として使っているのはありませんね。

寺尾 AI に感情がないということは、きっと肯定的に捉えられていますね。大学生に対して、AI を用いて優れた実践をしている先生から聞いたことですが、レポートの評価を AI にさせると、教員や友人と違って容赦ない。

梅野 客観的な評価をしますからね。

寺尾 はい。容赦ないのですが、評価される学生はむしろそれがいいと言うそうです。容赦なく言われると「なるほどそうか」とわかると。正直に言ってくれるありがたい相手として認識しているようです。先ほどの、AI に感情がないと言っていた生徒は、おそらくそのことを肯定的に捉えていると思います。

吉田 私の感覚なのですけれども、数学の授業で見ている生徒たちは、たぶん生成 AI のことを、ちょっと頭のいい同級生、頭のいい友人という感覚で使っていることが多いです。計算はよく間違えますけど、間違えたときには、「ちがうじゃん」とか、「全然答えになんない」ぐらいは言います。でも生徒は使います。頼りになる頭のいい同級生のような感覚で使っているという感じがします。

寺尾 中野中学校の生徒は、他者との対話を通して協調

的に学んでいく中で、構成主義的な学習観を自然に身につけていっていると思います。協働学習や探求学習に対して、基礎知識の訓練がおろそかになっているという批判をときどき見ます。もちろん基礎知識は重要で、構成主義的な立場でも基礎知識は不要だとは言っていません。構成主義的な学習の中で知識を獲得していくのですから、正当な批判ではないと思います。協働学習や探求学習が知識を軽視しているのではないかという批判を、教育現場の先生としてはどのようにお考えですか。

梅野 形だけの協働学習や探求学習だとそのように見られてしまうのかなと思います。グループで何となく話し合っ、自分の考えを明確に持たずに、人の考えを丸写ししてそのまま自分の答えとして出してしまうのだと、せっかく協働学習の場を設けても本来の目的が達成できていないですね。建設的相互作用も起きていないと思います。探求学習も、探求という名のシナリオがあってワークシートを埋めていくような、パッケージものの探求学習がありますが、そのようになつたら意味がないのだろうと思っています。

私は構成主義的な考えはとても重要だと思っていますが、学校現場では、知識を積み重ねていって初めて深い議論ができるという人も多いです。しかし、今は生成AIがあって、中野中学校には「学びのスタンダード」があるので、知識がない状態でもまず協働学習のスタイルをとって、対話している中でわからないことが出てきたら、そこで初めて知識を拾いに行くようなことができると思います。生成AIによって答えが先に出てしまうかもしれないけれども、このような答えになるのはなぜだろうと思って、必要な知識を拾いに行くようなスタイルですね。それを仕掛けるのが教師の役割かなと思います。「それは本当にわかっているの」「どうしてそのようになっているの」「何でそう思ったの」とたずねて知識を拾いに行かせる。その過程で知識を身につけていく。今まではこちらが知識を与えて、知識を得てから課題を解決していったけれども、学び合いながらひとつの答えが出てきたときに、「なぜそういう答えになったの」と問うだけで、その子がその答えに必要な知識を本当に持っているかはわかります。そこで知識がなければ、調べようという必然性が生まれるわけです。そのようなことを繰り返していくのがいいのかなと思います。今までの協働学習や探求学習は、生成AIがなかったので限界がありました。必要だと思っても、その知識を見つけにくいときに手間と時間がかかる。課題を考える教師側もすごく大変だった。けれども、今は生成AIが課題を考え

る補助もしてくれるし、知識を見つけにくいと生徒が思ったときには、プロンプトを工夫してやり取りしながら知識を補完できるようになってきている。ですから、たとえば知識構成型のジグソー法と生成AIは相性がいいなと思っていますし、今うちがやっている構成主義的な学びのスタンダードのスタイルは生成AIとすごく相性がいいと思っています。

寺尾 吉田先生、数学では特に積み重ねや基礎訓練を重視した意見が多いと思うのですが、それでもやはり中野中学校で行っているような構成主義的な学習は有効だし、知識を軽視しているわけでもないとお考えでしょうか。

吉田 そうですね。もちろん知識は大事で、それをないがしろにしているわけではありません。なぜその知識が必要なのかという、必要性を生徒に感じさせることが大事かなと思っています。こちらから一方的に知識を教えたとしても、「なぜこれやるの」というような感じになってしまうと思うのです。そうではなくて、学び合いの中で「これ、どういうことだっけ」「これ、何だっけ」と自ら調べて知識を得ることが非常に大事かなと思っています。

寺尾 自分は大学で統計学の入門講義を担当していて、やり方を反省しています。教科書を順番に前から学習して問題を解けるようにするという授業の進め方なので、一体なぜこれをやらされているのかわからないということになります。もう少し必要性がわかるようにしたいですね。あるいは先ほどおっしゃっていただいたように、先にアウトプットがあって、でも自分はそれをきちんとわかっているのだろうかと問う。そこから必要な知識へたどるようなことを工夫しなければいけないのかなと思います。少し悩ましいことは、高校で進学校に行ってしまうと、とにかく問題を解けるようにならないと「だって、大学に行けないでしょう」という話になる。

梅野 中学校も高校受験があるので、「問題が解けないことには」という考えの人もやはりいます。そのようなやり方もある部分では必要です。たとえば週に4時間あったら、1時間はそうやってやろうと割り切って、3時間は学び合いをベースにすればよいでしょう。定期テストが近くなったり、受験が近くなったりしたら、受験対策をやっていけばいいのかなと、割り切るしかないかと思っています。それでも、土台に学び合いのベースがあ

るから、きちんと主体的に学ぶ力がついているはずで
す。

寺尾 そうですね。生成 AI との対話の仕方はしっかり
身につけているので、試験や受験のために勉強しなくて
はならなくなっても、AI がいいパートナーになるだろ
うと期待できます。

梅野 そうした力をつけたいですね。

寺尾 こちらからおたずねしたいことはこれぐらいで
す。これはもう少し話しておきたいということがござい
ましたら、ぜひお願いします。

梅野 これまでいろいろな方々との出会いがありまし
た。青山学院大学の益川先生との出会いもすごく大きか
ったです。ちょうど「学びのスタンダード」を形作って
やっていこうと思ったときに、声をかけていただきました。
それで学習科学や認知科学など理論的な基盤が入っ
てきました。それを現場のグループで何度も咀嚼して、
いろいろな先生方の授業を見に行き、授業の振り返りを
話しました。先生方が変わればその教育を受けた生徒も
変わっていくはずなので、先生方が生成 AI を使いこな
せるようにしていきました。年に何回かある公開授業に
向けては、授業者の先生と伴走してプロンプトの設計の
仕方を習得してしてもらいました。そうしたことをコ
ツコツと積み重ねることで、同じように伴走できる先生
が増えていき、今の形になってきました。

吉田 今年の公開授業は2回ありますので、ぜひ見に来
てください。

寺尾 ありがとうございます。ぜひ拝見させていただき
たいです。本日はありがとうございました。



梅野哲・益川弘如・豊田大登『AI と仲間と学び合う
生成 AI × 対話 × 仲間 = 新たな学びの領域へ』明治図書